認知症高齢者への口腔ケア

永末書店

2．介護予防を示唆した事例

日本口腔ケア学会理事長
鈴 木 俊 夫

はじめに

8020表彰を受けた高齢者が、認知症に陥り、口腔の管理が徐々にできなくなっていった事例を紹介し、今後、増加していくであろう、認知症に罹患した高齢者への、対応を、どのようにしたらよいのか、読者と共に、考えてみたい。

介護予防を示唆した事例

事例　T氏　大正3年生

1）軍隊生活は、20～27歳
2）好き嫌いは無く、規則正しい生活（厳しいくらい規則正しいとのこと）
3）戦後　林業　商社　などへ　勤務し　定年で退職
4）夫婦2人暮らし。生活には困らない程度の収入。
5）子供さんは、いない。

生活習慣その他

1）平成6年　胃がんが、検診で発見され、手術。
2）一日　5回に分けて食事を摂っている。
3）10年位前から、野菜中心の食事をしている。
4）野菜は、一部、自分で栽培している。
5）油物は、月1～2回食べる程度

歯科に関する経験

1）当院へ受診するまで、歯が比較的丈夫だったため、困った時以外、歯科治療を受けていない。
2）歯磨き指導は受けていない。
3）歯磨きは、自分で、本を読んだりして工夫をしていたと。
　外側は、上下に動かし
　内側は、掻き出すようにしていた。
　一日、2回　必ず、歯磨きを欠かさない。

歯科受診の契機

1）老人手帳に歯科の記載があることが、契機となり、歯科受診をするようになった。
2）几帳面な性格から、自分自身で歯科手帳を記載して、口腔内を毎日のように、観察。歯磨きを励行し、食事・間食を自己管理。

8020表彰

1995年（平成7年）表彰を受ける

経　過

1986年（昭和61年）11月　初診

その後　半年に一度程度　受診

1994年（平成6年）胃がんの手術を受ける

歯科受診は、続いていたが、次第に、もの忘れが、出現。

認知症の診断を受ける。

奥様も体調を崩し、入院生活となり、T氏は、一人暮らしに。

認知症が徐々に進行。あれほど、口腔内を観察し、自分で、工夫して歯磨きをしていたのにもかかわらず、歯磨きをすることさえ、忘れるようになる。

次第に、むし歯や歯周疾患が進行し、抜歯しなくてはならない様相に陥いる。

2004年（平成16年8月）には、上顎前歯部の義歯を作成・装着。

しかし、歯磨きがもう自分自身でできなくなっていたため、介護支援専門員に、義歯の取り外しなどの協力依頼をした。

2004年（平成16年12月）に、歯科口腔外科で、進行したむし歯を抜歯してもらい、口腔内が不潔にならないように、かつ、口腔ケアを、十分できるように、治療を受けていただいた。

2006年には、さらに、認知症が進行し、在宅での生活には限界があると判断され、施設入所となった。

それまで、通院のため、遠方の身内に来ていただき、身内がこれない場合には、介護支援専門員に付き添ってもらっていた。

まとめ

1986年から2006年までの、20年間、T氏を、診てきた。

頑固なまでに、歯磨きをし、口腔内を清潔に保つ努力を続けていたT氏が、認知症を発症し、老いとともに、その症状が進行していく様を間近に見ていた。

その間、筆者も、介護支援専門員であり、地元での連携も、十分図れるところから、周囲の人、身内、担当の介護支援専門員、ヘルパーなどと、ともに、支えてきたが、なすすべもなく進行し、施設入所になるころには、歯科医院へ来ていることさえ、理解が難しくなっていた。しかし、このような状態でさえも、歯がどうなっているのか、気にかけていた。

考　察

この事例を通し、認知症が進行してしまう前に、介護支援専門員は、情報を的確に把握し、主治医など関係者と連携を図り、介護予防に取り組んでいたら、進行をある程度、抑えることができたのではないかと考えられた。

しかし、当時は、まだ、通所関係も整備・充実がなされておらず、また、介護予防が、始まっていなかったため、残念であったが、今後、かかりつけの医師・歯科医師などが、認知症を早期に発見し、介護予防を勧めていけば、薬剤の進歩と併せることにより、認知症の進行を遅らせることができるのではないかと期待している。